

# 明治大学 2019 年度研究者交流支援事業 外国人学識者招聘プログラム報告書

招聘責任者  
竹村正明  
商学部専任教授  
takemura@meiji.ac.jp

被招聘者氏名 A. Fuat Firat  
所属機関 University of Texas, Rio Grande Valley  
招聘期間 2019 年 9 月 22 日 (日) - 2019 年 9 月 28 日 (土)  
特別講義

演題：The Foundations of Qualitative Research and Analysis  
日時：2019 年 9 月 24 日 (火) 6 時限目 (19:30-20:50)  
会場：グローバルフロント 3 階 403H 講義室  
参加者数：5 名

## 実施報告

今回の交流事業は、Robert C. Vackar College of Business and Entrepreneurship, University of Texas, Rio Grande Valley から A. Fuat Firat 教授を招聘し、定性的研究方法論の基礎(The Foundations of Qualitative Research and Analysis)というテーマで開講した。告知は開講約 1 か月前の 8 月 27 日から行い、写真 1 のようなポスターを学内に掲示した。掲示にあたっては、招聘責任者および国際連携事務室の協力を得て、学内掲示板のみならず本学ホームページでも告知された。そのため、大学院講義向けで、かつ、高度に専門的な講義内容であるにもかかわらず、学内大学院生のみならず、他大学からも教員も含めて 5 名の出席者を得た。

Firat 教授はマクロマーケティング学会の会長を務めたのみならず、各種英文ジャーナルの編集者を歴任されるほど、世界的に著名なマーケティング研究者である。ご専門は、マクロマーケティングであるが、消費社会論、社会構造論、比較文化論や科学的方法論まで多岐にわたる。提出された CV では国際ジャーナル(レフリード)にも 100 本以上の論文があり、編集書、特集号、招待講演など多数の業績がある。世界的に多くの大学で客員教授を勤められたが、日本では初めてであり、本学客員教授を受けていただいたことは、大学としても大変名誉なことであることを記しておきたい。

講義は、商学研究科商業特殊理論講義の特別講義として開講された。商業特殊理論講義は



写真 1 告知ポスター

方法論を学んでおり、定性的方法論講義は、まさに講義目的と適合するテーマであった。というのも、科学的成果（ここでは論文という様式であるとする）と文学、批評、ジャーナルや新聞記事との違いは、方法論に対する社会的信頼があるかどうかである。特に、現代の経営学は事例ベースの研究が多く、それに対する科学的アプローチを採用する側からの批判は、一般化ができないことである。そのときに想定する一般化とは、因果関係の安定的観察のことである。つまり、AがあればBになる、という因果関係が、非常に数多く観察されるので、AがBを生じさせるメカニズムが想定されるという論理の安定性のことである。

安定性とは、何度も何度も観察できるという意味である。もっともすぐれた安定性は法則化されることであり、たとえば、万有引力の法則は、地球上の多くの場所で観察できる。

しかし、経営ではそのような法則が働くことは稀であり、特に開放系ではエネルギーの出し入れがあるので、安定することは例外的である。となると、経営法則というのは非常に抽象的な論理関係か、極めて特殊な条件でなければ、観察できないのである。



写真2 講義の様子

その場合、科学の目的は法則発見や特定から、なぜそうなるかを説明することとすることが有効である。むしろ因果メカニズムを推論することや仮設的発見がアカデミックな作業となるだろう。定性的方法論は、そのような研究作業において有効となり、今回の講義ではエスノグラフィーとディスコース分析の2つの手法について解説が行われた（写真2）。

この交流事業によって講義のみならず、その方法論を用いた日本市場の分析を現在計画しており、そのための準備作業を滞在中に行った。それはまず、東京の現代消費市場を観察することであり、以下の予定で出張調査を実施した（表1）。

表1 東京消費市場の観察調査

実施日	場所	観察目的
9月24日（火）	戸越銀座	住居地区の商店街再生、買い物調査
9月25日（水）	浅草、秋葉原	市場の構造的変遷、消費者の比較
9月26日（木）	池袋、巣鴨	盛り場、商店街構造的発展の比較
9月27日（金）	新宿、渋谷	最先端の消費調査、消費者の町内分布調査
9月28日（土）	アメヤ横丁	市場の国際化

これらの成果は、現在、国際ジャーナルに投稿する準備をしているが、まず学内紀要に投稿し、それを国際学会で発表することでブラッシュアップしていく計画である。

（文責：竹村正明）